

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

大淵, 貴之
九州大学非常勤講師

山根, 泰志
九州大学附属図書館司書

<https://doi.org/10.15017/20561>

出版情報：中国文学論集. 40, pp.148-162, 2011-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

大 瀧 貴 之
山 根 泰 志

はじめに

狩野亨吉（かのうこうきち一八六五～一九四二）は、近代日本を代表する思想家・教育家、そして大蒐書家であり、その莫大な蔵書の多くは、東北大学に収められ、狩野文庫として全国的に知られている^①。その狩野亨吉から、実は九州大学も大量の図書を購入していたことは餘り知られていない。

九州大学が狩野亨吉より購入した図書は、中央図書館狩野文庫の朝鮮本・人名録・書目類、同桑木文庫中の数学生文書、医学図書館貴重書庫中の眼科教室旧蔵の類書・医書類、以上三つのコレクションが現在確認されている。

中央図書館狩野文庫は、大正十二年（一九二三）十月本部が大同洋行主石本恵吉を介して購入し（二四七部七二六冊、二二一円一〇銭）、翌年十二月、創設されたばかりの法文学部に移管され、昭和二年（一九二七）に附属図書館本館に移管されたものである^②。総合目録カード^③には「狩野文庫」の印が捺されているものの、現物にはなく、しかも他の図書と混排されているため、現在では餘り存在を知られていないが、昭和三年三月の九州帝国大学創立記念日、法文学部開学式の展示会「図書館学参考書展覧会」（附属図書館初の展示会）では狩野文庫本が主な展示品として多数出品されており、朝鮮本も前開恭作『朝鮮の板本』（松浦書店、一九三七年）に紹介されている^④。

桑木文庫は、近代日本を代表する物理学者であり、九大理学部の基礎を築いた工学部教授桑木或雄（一八七八～一九四五）^⑤が、工学部数学物理学教室に蒐集した科学史文献を、理学部移管後に斯く称したものである。その中に、

狩野の旧蔵書が含まれていることは、桑木自身が述べていることもあり、研究者には比較的知られている。⁽⁷⁾ その数は四九二部一二二五余冊（桑木文庫和漢書の約三分の一に相当）に及ぶことが推定される。⁽⁸⁾

医学図書館貴重書庫所蔵資料は、医学部諸講座提供の蔵書が基礎となっており、「眼科／和書——號」の方形印が捺された眼科教室の旧蔵書も大量に含まれている。⁽⁹⁾ その眼科教室旧蔵書中の和漢古書の大半が、実は狩野亨吉から購入した図書であることは、これまで知られていなかった。平成十九年（二〇〇七）十月より二十三年（二〇一一）三月まで附属図書館主催で開催されていた貴重文物講習会の準備作業の中で、医学図書館貴重書庫に類書等の医書以外の貴重な漢籍が未整理のまま保管されていることに気づき、その中の汲古閣版『十七史』から「狩野氏図書記」の蔵書印を見出したことが、一連の発見へとつながる契機となった。⁽¹⁰⁾

本稿では、九州大学が所蔵する狩野亨吉関係図書につき、これまで知られていなかった眼科教室旧蔵の類書・医書類（以下眼科教室旧蔵狩野本と称す）を中心に、その受入経緯、蔵書全体の概要を報告し、その意義と今後の課題を述べるものである。

一、眼科教室教授大西克知と狩野亨吉

大西克知（おおにしよあきち一八六五—一九三二）は、日本近代眼科医療の草分け的存在であり、明治三十八年（一九〇五）に九州大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学の初代眼科教授として招かれ、世界有数といわれる規模を誇った眼科教室の基盤を作った。特に大正十二年（一九二三）竣工となった眼科教室棟の新築は最大の事業であり、海外視察の成果を盛り込みつつ自ら設計し、そこには充実した医療設備・機械が導入された。⁽¹¹⁾ 唯一煉瓦を用いた図書室も、防火シャッターと鉄扉を備え、地下室まであった。⁽¹²⁾ 昭和二年（一九二八）頃の眼科教室の蔵書数は約一九〇〇冊であり、その規模は他の教室を圧倒し、「日本一」の図書室と称せられた。特に五〇〇冊を超える和漢古医書が特徴で、そのほとんどが狩野亨吉によりもたらされたものである。⁽¹³⁾

東京大学駒場図書館狩野文庫（狩野亨吉の日記・書簡を中心とする文書類）所蔵の「九州帝国大学医学部書籍納入関係書類」と、医学図書館に保管される『九州帝国大学医学部附属医院眼科図書原簿（和書雑誌）』により、眼科

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

教室旧蔵狩野本の受入経緯を整理する。^⑮ 大西と狩野は、大西の義兄で第一高等学校教授菅虎雄（一八六四～一九四三）を介して交流があり、大西が東京にて入手できる図書の斡旋を狩野に依頼したことに始まる。大正八年度に『国書解題』・『国書刊行会叢書』、大正九年度に汲古閣版『十七史』、明板『三才図会』等の類書類を購入しており、当初は医書ではなくむしろ図書館向きの大部な参考図書類を求めていたことがわかる。大正十年度からは、医書の大量購入が始まり、それは大西が退官する大正十五年五月以降の昭和二年まで続くが、その間にも、類書等の参考図書類の斡旋を依頼している。^⑯ 眼科教室に最新の設備を整えながら、一方で和漢の古医書を蒐集し、医学の発展史を理解することを重視していたことは、大西の優れた見識というべきだが、それだけではなく、類書や史書等の医書以外の大部な参考図書類を揃え、本格的かつ総合的な図書館の創設を目指していたことは特筆に価する。

なお、納入者の名義は「菱山雄平」になっているが、反町茂雄編『紙魚の昔がたり』明治大正篇（八木書店、一九九四年）によれば（「角括弧内」および傍線は筆者）、

「狩野」先生がその蔵書の一部を東北大学へ売りましたのが六万円で、ここにあります「売立」目録の分の入札額が二万何千円。「…中略…」それ以降は九州大学へも御自分でどんどんお売りになって、自分の名では悪いから、門の傍の菱山雄平という人の名義を用いてかなりお売りになりました。

とあり、狩野が九州大学と図書売買契約を交わす上で、自らの名が表に出ることを避けるため名義を借りた人物であることがわかる。

二、眼科教室旧蔵狩野本の概要と現状

表一は、『九州帝国大学医学部附属医院眼科図書原簿（和書雑誌）』により眼科教室旧蔵狩野本を抽出し、それを『古文書関係リスト』（九州大学医学図書館）及びミヒエル・ヴォルフガング監修『九州大学附属図書館医学分館古医書目録（和漢書）』（二〇〇三年）^⑰に未掲載の図書を算出したものである。全ての図書現物を確認したわけではないが、『九州帝国大学図書目録』第一～二巻（九州帝国大学附属図書館、一九三二～一九三三年）等を参照しつつ類推を交えたもので、正確なものではないが、全体の概要と現状を理解するための便宜的なものと了解されたい。

表一

図書の種類	計	内目録未掲載
医書	3704	984
類書	1081	1033
史書・参考図書・雑誌	729	720
	総計 5514	2737
唐本（内明版）	2048（449）	1432（231）

医書以外の類書等の参考図書類が全体の中で大きな比重を占めていること、そしてそのほとんどが目録未掲載（≡存在が知られていない）であることがわかるだろう。もちろん大部な図書が多いので、部数で言えば全一二八部中三〇部程度だが、明・陳耀文『天中記』（万曆二十三年序刊、土屋鳳洲旧蔵）、明・俞安期『唐類函』（万曆三十一年序刊）、明・王圻『三才図会』（万曆三十七年序刊）、明・黃道周『博物彙編』（崇禎八年序刊、周防明倫館旧蔵）等の明版を含み、後に設立される附属図書館や法文学部はもちろん、全国的に見ても所蔵が少ないものが多く、貴重なコレクションとなっている²³。医書にも、明・趙季敷『校増救急易方』（弘治十一年序刊）、明・周文采『外科集驗方』（嘉靖二十四年刊、野間三竹・森立之・中島棕隠旧蔵）等の貴重な漢籍が数多く見られる。

眼科教室旧蔵狩野本が、医学図書館貴重書庫内でどのように排架されているかを確認しておく。まず、和漢書は基本的に混排であって、教室別等出所が反映された排架にはなっていない²⁴。「アー」のように書名の五十音順に分類・排架された図書の後に、類書、国文学関係の和本の医書以外の図書や分類が付与されていない未整理資料が雑然と排架されている。目録掲載資料は前者の中に混排されており、目録未掲載資料は概ね後者に排架されているが、前者の中に混排されている場合も多い。もちろん、近代以降の洋装本・雑誌等や、その他何らかの事情により貴重書庫に搬入されていない図書も多数存在すると思われる。

三、狩野亨吉関係図書の性格と由来

大西の狩野宛書簡からも看取されるように、大西は狩野からその蔵書を購入するというより、東京の書店から眼科教室のための図書を見繕って斡旋してもらうことを要求しており、実際購入する類書の書名に文求堂等東京の書店名が附記されている書簡もある（大正十年三月十三日大西より狩野宛書簡）。狩野は、明治四十一年（一九〇八）に京都帝国大学文科大学学長を辞して後は書画骨董の鑑定・斡旋を主な生業にしており、大正元年（一九一〇）の

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

東北大学への狩野文庫第一次納本時に六万冊もの蔵書売却していたことも考え合わせると、九州大学の図書購入について言えば、狩野はブローカーとしての性格が強かった可能性はある。しかし一方で、中央図書館狩野文庫の人名録・書目類や桑木文庫中の数学天文書には多数の狩野の蔵書印が捺されており、医書にも少ないながら狩野が所蔵していた痕跡が残っている。いずれであっても、狩野亨吉という当時に並ぶ者無き目利きによって選ばれた図書には違いないとはいえず、九州大学が狩野亨吉から購入した図書がどのような性格を持つものなのかを把握するためには、狩野が斡旋した図書と、狩野が所蔵していた図書との区別が重要となってくる。

その手がかりを与えるのが、狩野の日記の大正十二年（一九二三）二月八日にある架蔵書数である。⁽²³⁾

- I 和漢書（唐本ヲモ含ム）
- | | | | |
|------------|--------------|-------------|-----------|
| (1) 書目七五〇 | (2) 数学天文学九五〇 | (3) 医学五〇〇 | (4) 兵書二〇〇 |
| (5) 地図一〇〇〇 | (6) 鑑定六〇〇 | (7) 名家自筆二〇〇 | (8) 雑 |

この年の十月に九州大学への人名録・書目類・数学天文書の売却があり、医書も眼科教室に引き続き納入しているので、少なくともこれら（人名録は鑑定に必須のツールなのでその中に含まれていると思われる）については、狩野が自らの蔵書を九州大学に売却した可能性が高く、蔵書印等もそれを裏付けている。

人名録・書目類は、狩野文庫第一次納本時にはほとんど手放さず、九州大学に売却した後の大正十三年（一九二四）三月の第二次納本時に書目類を東北大学に売却している。⁽²⁴⁾ これらを手元に残していたのは、書画骨董の鑑定・斡旋を主な生業にしていた狩野にとって商売道具だったからだろう。恐らく人名録・書目類をまとめて売却したのは九州大学が初めてだったと思われる、そのためか、唐船により長崎に持ち込まれた禁書『天学初函』の取り調べ記録である『天学初函大意書』をはじめとする貴重な写本が多数含まれている。⁽²⁵⁾

数学天文書と医書は狩野文庫第一次納本時に相当数売却し、⁽²⁶⁾ またこの大正十二年時点では九州大学への医書売却が始まっているにも関わらず、これだけの数を所蔵しており、もちろん手元に残していたものもあるが、狩野文庫第一次納本以降にも精力的に蒐集していた結果だと考えるべきだろう。⁽²⁷⁾

狩野が九州大学に売却した図書の性格を把握する上で、大きな示唆を与えるのが蔵書印である。狩野は、書齋が丸ごと売りに出されている中に、文献史上見逃してはならないものがあると、全部買い取ったというが、⁽²⁸⁾ 確かに狩

野から購入した図書を調査していると、同じ蔵書印を何度も見るということは多い。特に頻見されるものをあげる
と、渡部邁・信父子（「下埜国渡部氏蔵書印」・「渡部文庫珍藏書印」³⁰）、和算家細井寧雄（一八〇二〜一八七三、「細
井」）、丹波園部出身の漢方医寺尾元長（一八〇〇〜一八四七、「柳外園蔵書印」）、越後加茂の蘭方医森田千庵（一七
九八〜一八五七、「山吉文庫」・「巢守文庫」等）³¹の蔵書印で、現在確認できただけでもかなりの数にのぼる。寺尾元
長と森田千庵の旧蔵書の多くが同じ時期にまとめて納入されていることから窺えるように、狩野の図書の蒐集と
管理のあり方が反映されたものといえるだろう。これらには旧蔵者の見識や環境を反映して数多くの貴重な文献が
含まれており、そうした良質の蔵書群を、狩野は惜しみなく九州大学に売却したのである。

おわりに

狩野亨吉から購入した図書は、純粹に狩野亨吉旧蔵書とは言い難い部分もあるが、九州大学が個人の蔵書を受入
れたもので、大規模なものとしては最初のコレクションと言ってよいだろう。もちろん東北大学狩野文庫とは規模
の上で比較にはならないが、狩野の高い見識が反映された貴重な文献や蔵書群が多数含まれていたことは、これま
で見てきたとおりである。

狩野の立場からすれば、蔵書の分散を避ける意味でも売却先は東北大学でもよかつたはずであるが、結果的にこ
れだけのコレクションを九州大学にもたらしてくれたのは、もちろん経済的事情もあるだろうが、何よりも大西・
桑木といった人々との親交があったからである。そうした交流そのものが近代の学問や知識人のあり方を考える上
で重要だが、何よりも本という無機質なものの中に、人と人との繋がりとという血の通ったものが流れていることを、
改めて実感させられる。

九州大学側の事情から見た場合、良い本を入手しようとするれば、どうしても古書が集中した東京で購入せねばな
らず、その意味で地理的に九州は不便であり、大西の書簡にもそのことが窺える。当代随一の本の目利きである狩
野の斡旋と蔵書売却によって、東京にあった本が大量に九州にもたらされたことは、古籍籍所蔵機関が東京に集中
している現状を考えても文化的な意義は大きい、結果的に震災や戦災から多数の本が救われたことも付け加え

ねばなるまい。東京大学に譲った安藤昌益『自然真営道』稿本を関東大震災で失った時には、既に九州大学への蔵書売却が始まっていたから、狩野にその意識があつたかどうかかわからないが、前述の『天学初函大意書』のように、東北大学と九州大学にしか所蔵されていない写本も多く、日本の東と西で分散していることで、結果的にリスク回避の役割を果たしている。

また、九州大学が購入した図書は、書誌学・科学史という狩野の核とすべき分野が中心であるが、東北大学と九州大学に分散したそれらの蔵書を総合的に分析することで、個々の資料についても、さらには狩野の思想についても、新たな評価が可能ならずである。そのためにはまず九州大学側の目録整備が課題である^⑧。

科学技術の発展に伴う様々な問題が唱えられて久しいが、これまで人類が自然とどのように向き合い、思索してきたのかを知ることが、これらの問題を解決する大きな手がかりになる。大西・桑木といった九大草創期の教授の長期的視野に立った高い見識と、狩野亨吉という不世出の思想家の存在によって、九州大学にはこれまでの人類の思索が刻まれた貴重な文献が大量に所蔵されている。狩野亨吉は、自らは一冊の著書も遺さなかったが、これからの人類のための大きな基盤を遺してくれたのである。

注

- (1) 狩野亨吉と狩野文庫については、青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』（中公文庫、一九八七年）、中村士『狩野亨吉の天曆学書蒐集と天文学者平山信との親交』（『東洋研究』一五五、二〇〇五年）『狩野文庫概説』（東北帝国大学附属図書館、一九三七年）、『ものがたり東北大学の至宝』（東北大学出版会、二〇〇九年）を参照。
- (2) 『九州帝国大学図書出納簿』・『九州帝国大学法文学部図書出納簿』・『九州帝国大学附属図書館図書原簿』による。
- (3) 「目録カード画像検索システム」により、インターネット上から検索・閲覧可能である。
- (4) 『図書館学参考書展覧会目録』（一九二八年）。武鑑類も昭和十年度開学記念展示で展示されている。
- (5) 桑木文庫については、平岡隆二『桑木文庫』（九州大学百年の宝物）丸善プラネット、二〇一一年）を参照。

(6) 「私は九大在任中、大正の初に因らず長崎で本木、志筑等阿蘭陀通詞の訳稿等を見、又大分で梅園及万里の著述草稿等を見てから、日本支那の科学の古文獻の蒐集を思立ち、続いて西洋の科学史文献を集め、三十年余の間に相当の量に達しました。其中、狩野亨吉先生が日本の古曆天文書を蒐集せられたものを譲受けたものもあり、又物理学史の著者 Edmund Hoppe 翁にゲッチンゲンで遇ひ、翁の死後、其の遺蔵の科学史文献五六百冊を買受けたものもあります。皆九大の教室所蔵で、資金は鮎川義介氏の好意に依ったものもあります」(桑木彥雄『科学史考』河出書房、一九四四年、傍線は筆者)。狩野は桑木が初代会長となった日本科学史学会の顧問であり、二人は科学史研究を通じて交流を持っていた。

(7) 平岡隆二「桑木文庫について」(第三回貴重文物講習会、二〇〇七年 URL: <http://hdl.handle.net/2324/10622>) を参照。
(8) 工学部時代の図書原簿が現在所在不明なため、桑木文庫の中にとだけ狩野旧蔵本が含まれているかは確定し難いが、図書自体に工学部時代の受入日と備品番号を記した紙が貼付されていることを利用し、「狩野氏図書記」の蔵書印が捺された図書から受入日と備品番号の範囲を推定し、桑木文庫成立以前の目録と思われる『自然科学古典目録』の備品番号から狩野亨吉旧蔵書を抽出した結果が以下の通りである(受入日・備品番号・数量の順)。

大正九年七月三十一日	八〇三六八〇〜八〇三七二八	一九部	四九冊
大正十二年十月二十七日	八〇五七七三〜八〇六二〇〇	四七〇部	一一六〇余冊
同年十一月九日	八〇六二三一〜八〇六二三三	三部	一六冊
		計四九二部	一二二五余冊

大正十二年十月は、朝鮮本・人名録・書目類を本部に納入した時と一致している。狩野の大正十二年五月八日の日記に、「九大法文数学天文等ノ書取調」とあり、法文学部用の図書と数学天文書の調査と納入は、まとめて行われていたことがわかる。

(9) ミヒェル・ヴォルフガング「貴重古医書コレクション」(前掲『九州大学百年の宝物』)を参照。

(10) 「附属病院各料年度別図書所蔵数」(『七十五年史』九州大学医学部創立七十五周年記念事業後援会、一九七九年)によれば、昭和三十一年(一九五六)から三十二年の間に眼科の図書所蔵数が、一五二五三冊から三六五一冊に激減し

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

ている。昭和三十二年五月に医学部分館の新館が開館しており、それを機に眼科教室の蔵書を移管したものと思われる。「医学図書館の沿革(三)」(「図書館情報」三一―一、一九六七年)によれば、昭和三十五年頃に、教室から医学部分館に移管されて間もない眼科教室旧蔵書を柱とする古医書群が未整理状態のまま放置されており、それに退官直前の医学部教授金関丈夫(一八九七―一九八三)が気づいて仮整理に協力したとある。

(11) 狩野の蔵書印が捺されている図書は、現在の所この汲古閣版『十七史』と『重訂解体新書銅版全図』しか確認できず、「狩野様」の宛名が書かれた古書店の値札が本に残っている場合があるが、少ない。狩野の旧蔵を示す痕跡が乏しいことが、これまで知られていなかった一因であろう。

(12) この眼科教室の建物は、半世紀以上の間使われた後、昭和五十六年(一九八一)に解体された。『九州大学医学部百年史』(九州大学医学部創立百周年記念事業後援会、二〇〇四年)を参照。

(13) 『二十五年史』(九州帝国大学医学部、一九二八年)を参照。

(14) 戦後ではあるが、「医学部各教室年度別図書所蔵数」・「附属病院各科年度別図書所蔵数」(前掲『七十五年史』)の昭和二十八年(一九五三)の統計によれば、蔵書数が多い順に眼科一四二六三冊、次いで衛生学・公衆衛生学・寄生虫学一八六二冊、次いで医学部分館一七九一冊で、やはり眼科教室が群を抜いている。

(15) 鬼頭鎮雄『九大風雪記』(西日本出版社、一九四八年)。

(16) 受入の概要を整理した結果が以下の通りである(受入日・備品番号・各受入日の最初に記載された書名・数量・金額の順)。なお、書名は明らかな誤字を除き、図書原簿上の表記をそのまま記載している。

大正八年十月三日	二三四二	国書解題	一冊	一七円
同年十二月十二日	八一二七〜八三五五	国書刊行会叢書	二二九冊	三一円二八銭
大正九年五月十四日	二四四五〜二八四四	汲古閣版二十一史〔十七史〕	四〇〇冊	三八八円六〇銭
大正十年三月二十九日	二九四二〜三三七六	増補文献備考等四部	四三五冊	四七八円
同年五月九日	三三七七〜三五六八	格致鏡原等二部	一九二冊	一四五円
同年八月二十四日	三五八六〜四〇一九	医道二千年眼目編等七八部	四三四冊	三〇二円三〇銭
同年十月二十日	四〇五一〜四四一一	医語類編等二二一部	三六一冊	四三二円

大正十一年一月十八日	四四一七〜四九五八	阿蘭陀伝栗崎流家方集等一〇七部	五四四冊	三三九円一〇銭
同年二月十七日	二〇一〇〜二〇一五	日本医事雜誌索引	六冊	一二円五〇銭
同年五月二十三日	四九七九〜五〇五五	医院治驗録等三九部	七六冊	六二円八五銭
同年六月二十九日	五〇五五〜五二〇五	医事問答等四〇部	一五一冊	五九円七〇銭
同年七月一日	五二〇六〜五二二七	医家初訓等一九部	二二冊	一三円二五銭
同年七月三日	一三一三	衛生宝函	一冊	三五銭
同年八月三日	五三三一〜五三一四	医経原旨等三九部	八四冊	五二円一五銭
同年八月二十一日	一三一四	仏文眼科雜誌	一冊	六円四〇銭
同年十月十四日	五三二五〜五四六一	格致餘論疏鈔等三四部	一三七冊	八一円五銭
同年十一月十六日	一四三三〜一四三七	動物学雜誌	三〇冊	二〇七円
同年十二月十三日	五四七四〜五六三六	伊百乙薬性論等六四部	一六三冊	一七七円五五銭
同年十二月二十三日	五六三七〜五八六一	挨穴資蒙等六三部	二二五冊	一〇六円七五銭
大正十二年二月二十三日	五八七四〜五九三七	医事集談等一部	六四冊	四八円三〇銭
同年三月二十四日	五九四八〜六一三七	医事秘記等七〇部	一九〇冊	一四四円五〇銭
大正十三年三月八日	六一六八〜六一八七	医学捷経等五二部	一〇五冊	九一円五〇銭
同年八月十二日	六二八一〜六四三六	医学院学範等四四部	一五七冊	一六三円二五銭
同年十一月十二日	六四三七〜六四八六	医門関等三四部	五〇冊	五二円八〇銭
同年十二月五日	六四八七〜六九二四	医方類聚等二九部	四三八冊	四二八円五五銭
大正十四年三月三十一日	六九四六〜七〇〇四	雑病広要等二九部	五九冊	一一三円六〇銭
同年五月十二日	七〇一五〜七一〇一	医学管錐外集等三四部	一二〇冊	一四九円
同年五月十九日	七一一二	回生堂方林等五〇部	九七冊	一五円一五銭
同年六月十五日	七二三三〜七二四九	癸未掌記等一四部	一七冊	四三円一〇銭
同年七月三日	七二五〇〜七三八五	温知病因等六五部	一三六冊	一三一円

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

同年七月十五日	七三八〇〜七四二六	医学至要鈔等一七部	四一冊	四四円七五銭
同年八月二十一日	七四三五〜七四六九	運氣論諺解等二〇部	三五冊	四七円
同年十月三十日	七四七三〜七五六一	天中記等一〇部	六九冊	六四円
大正十五年一月十五日	七五四七〜七六〇三	胃氣論等一八部	五七冊	四九円
同年二月四日	七六〇七〜七六五五	儒門医学等一〇部	四九冊	三五円
同年七月十四日	七六五八〜七六九三	医学所分限帳等一七部	三六冊	三五円
同年九月四日	七六九五〜七七〇二	一貫堂脚氣方論等七部	二〇冊	二〇円
同年十二月十一日	七七〇三〜七七〇六	本草方方鍼線等一四部	一五七冊	七二円二〇銭
昭和二年三月二十五日	七七四三〜七八九五	医事表等八部	六四冊	二七円
昭和二年八月二十七日	四〇二六〜四〇二八	溝部有山備忘録等一七部	六二冊	三〇円七〇銭
	四〇三六〜四〇四九	医事雑誌	一冊	一円五〇銭
	四九六八・五三二一	計二二八八部	五五一四冊	五一〇五円一九銭
	七九六七〜八〇〇九			
	一三二二			

最後の『医事雑誌』だけ受入日がかなり後になっているが、同じ日に複数の雑誌が受入されているので、恐らくは製本されて備品登録された日であって、納入された日ではないと思われる。

(17) 明治二十四年(一八九一)、大西は、菅虎雄の妹孝代と、東京英語学校長杉浦重剛(一八五五〜一九二四、大西・菅の恩師)の媒酌で結婚している。狩野と菅は帝大在学以来の親友であり、菅を介して大西と狩野は東京にて幾度も面識を得ていた。『故大西克知氏ヲ追憶シテ(一)』(『日本眼科学会雑誌』三六一一〇附録銀海叢話、一九三二年)、原武哲『夏目漱石と菅虎雄——布衣禅情を楽しむ心友』(教育出版センター、一九八三年)を参照。

(18) 汲古閣版『十七史』は、享保初年頃より『十七史』に『弘簡録』を加えて『二十一史』と称したものが中国より舶

- 載され流通するようになった。そのため、狩野・大西ともに『二十一史』と書簡でも記しており、図書原簿にも『二十一史』のまま記載されているが、実際には『十七史』である。なお、この本は、乾隆帝の諱を避け、『弘簡録』の封面題字の「弘」字を「宏」と改め、本文巻頭内題或は版心題等の「弘」字の最終画が缺筆されているため、乾隆帝以降の印本である。山城喜憲「汲古閣本十七史について」（『斯道文庫論集』一九、一九八二年）、大庭脩「江戸時代における唐船持渡書の研究」（関西大学東西学術研究所、一九六七年）を参照。
- (19) 大正十年六月二十五日大西より狩野宛書簡「ナホ購入ニ要スル経費ハ此度ハ可ナリ潤沢ニ御座候間随分多ク購入出来候半ト存候医書ノ外、類書ナド図書室向ノモノ御見当ノ節ハ御身計ラヒ御購入奉願候」。
- (20) 特に医学史についての著述を残していない大西が古医書を積極的に蒐集したことは、彼が伊予松山藩侍医大西宗節の孫であることと無関係ではないだろう。狩野宛書簡（大正十一年一月三十一日）にも大坂の蘭方医中天游（一七八二〜一八三五）が祖父の恩師であること等が話題になっている。
- (21) URL: http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/hp_db/figaku/cat_east.pdf
- (22) 大淵貴之「類書——中国の百科事典——」（前掲『九州大学百年の宝物』）を参照。
- (23) 医史学者岩熊哲（一八九九〜一九四三）旧蔵の杏仁医館文庫（解剖学教室旧蔵）は、ややまとまって排架される。岩熊哲については、岩熊哲『医史学論考』（畜産獣医出版協会、一九四三年）、佐藤裕「九州における医史学研究の系譜（一）岩熊哲の業績とその医史学観について」（『日本医史学雑誌』四五―二、一九九九年）を参照。
- (24) 青江舜二郎「狩野亨吉の生涯」（前掲）を参照。なお、同書で①を「書面」としているが、書目の間違いだらう。
- (25) 原田隆吉「狩野文庫」の蔵書構成の研究（二）（『図書館学研究報告』一六、一九八三年）を参照。
- (26) 大庭脩「江戸時代における唐船持渡書の研究」（前掲）を参照。第一次納本時に東北大学にも別の写本を売却しているが、こちらは九大本の原表紙にあたる部分がなく、書写年代も新しい。狩野が原本により近い写本を手元に残したかったためと思われる。
- (27) 原田隆吉「狩野文庫」の蔵書構成の研究（二）（前掲）。
- (28) 大正十一年（一九二二）四月に、狩野亨吉の蔵書の売立があり、名家自筆本を中心に、古写本・古版本を含んだ優

九州大学所蔵狩野亨吉関係図書について

品揃いで、総額は二一三〇二円と未曾有の出来高となり、内外を驚かせた。反町茂雄『蒐集家・業界・業界人』（八木書店、一九八四年）、『反町茂雄収集古書販売目録精選集』第一巻（ゆまに書房、二〇〇〇年）を参照。東北大学に膨大な蔵書を売却した後も、狩野が精力的に図書を蒐集していた状況が窺えよう。

(29) 八田三喜「狩野亨吉先生」（『科学史研究』六、一九四三年）。なお、狩野が没して間もなく執筆されたこの記事は、日本科学史学会会長だった桑木或雄が八田に依頼したものである。

(30) 中央図書館狩野文庫『大壑平先生著撰書目』、桑木文庫『増補万歳曆』、眼科教室旧蔵狩野本『明医小史』等。これらの蔵書印は、東北大学狩野文庫第一次納本にも見え（『経子史要覧』・『医籍考』等）、それ以前より狩野が相当数所有着したことを示す。なお、渡部父子の旧蔵書の多くは、東京大学に「渡部文庫」として所蔵されている。

(31) 桑木文庫『須彌界約法曆規慶應四戊辰年見行艸』（細井寧雄自筆）、『七部書』（写本）、和田寧『円理順逆小成』（細井寧雄写）、和田寧自筆『方理順逆法』等。細井は和田寧（二七八七〜一八四〇）の高弟で、関流の和算家である。その他和算家では、最上流の祖会田安明（一七四七〜一八一七）の著述に「安明之印」の印が捺されたものが多数見えるが、必ずしも自筆本ではないようである。平山諦・松岡元久編『会田算左衛門安明』（一九八二年）、下浦康邦「日本学士院における会田安明の自筆本について」（『数理解析研究所講究録』一一三〇、二〇〇〇年）を参照。

(32) 眼科教室旧蔵狩野本明・周文采『医方選要』（嘉靖二十四年序刊）、明・王肯堂『証治準繩』（万曆三十五年序刊、望月三英旧蔵）等。貴重な漢籍古医書を数多く含み、医学図書館におけるその中核となっている。鶴飼礼堂『和漢薬治療要解』（大正医報社、一九一七年）によれば、五六千巻といわれた寺尾元長の蔵書は、一時門人出口容斎が保管していたようだが（そのためか元長の旧蔵書とともに出口容斎の蔵書印が捺された『項髓疫説』が納入されている）、「嗚呼先生の苦辛励精の跡は今や殆んど亡し矣、其貯蔵の書籍、充棟数千巻、今果していづれに散逸しつゝある歟」と鶴飼礼堂が嘆いているように、その後散逸したようである。

(33) 桑木文庫『幾何原本』、眼科教室旧蔵狩野本『薬性精義』、『眼目伝』、『馬島流眼科方函』、『疔療秘録』、『布歛稀蘭葉方数』、藤林普山訳『解屍篇』等（以上全て写本）。森田千庵とその蔵書については、片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」（『法政史学』一四、一九六一年）、同「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」（『越佐研究』一八、一九六二年）、長谷

川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について（一〜四）」、『日本医史学雑誌』二〇一三・四、二二一〜二、一九七四〜一九七五年）、同「藤林普山訳『解屍篇』について——森田千庵署名（印）入り写本より——」、『日本医史学雑誌』三七二、一九九一年）を参照。

(34) 寺尾元長の旧蔵書は大正十一年一月に、森田千庵の旧蔵書は同年十二月に、かなりの数がまとめて納入されている。狩野が一度自分の書庫内に分散した旧蔵書を納入時にわざわざ復元させたとは考えにくいので、旧蔵書としてのまとまりを重視した狩野が、それをある程度維持したまま管理していたことを窺わせる。

(35) 狩野は、自分が苦心して蒐集した本の行く末について、「金があれば図書館を建て公開するのが上策、其が出来ねば図書館に寄附するのが中策、之すら出来ねば廉く纏めて図書館に譲るのが下策」と語っており（前掲八田三喜「狩野亨吉先生」、結局下策を採らざるを得なかったわけだが、「纏めて」とあるように、蔵書が分散してしまうのは、本意ではなかった可能性がある。

(36) 大西の狩野宛書簡（大正十年三月十三日）によれば、図書の購入と併せて帙の製作も狩野に依頼しており、「帙ノ製作ハ田舎デハダメニ御座候」と書き送っている。当時の福岡は、高等学校、大学、女子専門学校がある都市では全国一古本屋が少なかつた。『福岡古書組合七十五年史』（福岡市古書籍商組合、二〇〇三年）を参照。

(37) 東北大学狩野文庫は、「狩野文庫データベース」を公開しており（漢籍・新書を除く）、一部画像を閲覧することも可能である。九州大学は、狩野文庫については、「九州大学所蔵コレクションデータベース」により簡易目録を公開している。桑木文庫については、文庫全体は蔵書検索システムにより検索可能であるが、狩野亨吉旧蔵書のみを抽出することは現在の所できない。前述のように図書原簿がないため、確定が難しいという事情もある。医学図書館貴重書庫所蔵資料については、「九州大学附属図書館医学分館古医書目録」掲載のものは、蔵書検索システムにより検索可能であるが、その中の眼科教室旧蔵狩野本のみを抽出することは同じくできない。前述のように、そもそも目録データが作成されていないものが大量にある上、排架状況が複雑で図書現物を確認できていないものも多い。残念ながらこれらの課題を附属図書館だけで解決するのは難しく、一定の予算措置と専門家の協力が必要であろう。

〔附記〕 東京大学駒場図書館の皆様には、狩野文庫の閲覧につき格別の配慮を賜った。また、九州大学附属図書館、特に医学図書館の皆様にも調査にご協力いただいた。記して鳴謝申し上げる。



医学部眼科教室（大正14年頃）



狩野亨吉



菅虎雄



大西克知

中央図書館狩野文庫『天学初函大意書』

